

# 洛陽付近出土西周土器の編年研究

飯島 武次

## 1. はじめに

今日の洛陽市付近に造営されたと推定される西周時代の維い邑いに関する歴史地理学的研究や、西周維い邑い都城址の遺跡に関しては、未解決の問題が多い。西周成王の時代に、周公旦によって洛陽の地に東都としての成周と王城が造営されたと伝えられている。洛陽地区に於いて今日までのところ、城壁や宮殿址と言った都城址に伴うべき西周遺構は発見されていないようである。しかしながら洛陽市付近では、幾つかの西周遺跡が発見され、土器や青銅器の出土が報告されている。特に洛陽老城から瀘河兩岸にかかるといふ地域では、西周時代の墓の外、車馬坑・鑄銅遺跡など豊富な遺構が発見されている。これらの遺跡と古典文献の記載から、瀘河兩岸から澗河の間に西周の東都である成周・王城が存在していたとの推論も成り立つ<sup>1)</sup>。

成周・王城の遺跡に伴うと推定される洛陽地区出土の土器は、当然の事ながら殷文化土器の伝統を強く有し、豊鎬地区の土器とは趣を相当異にしている。これらの土器に関する編年研究は、陝西の周原や豊鎬地区に比べると研究成果が希薄である。これまでの西周土器研究は関中地区出土の遺物に対するものが中心であった。このような状況には関中地区出土の遺物に良好な資料が多いという理由があった。しかし、洛陽地区は西周考古学研究の上で大変に重要な土地で、この地区の土器研究がおろそかにされているのは片手落ちであると言わざるをえない。そこで資料に限られ、研究を行う事が困難である事を重々承知の上で洛陽地区西周土器の編年に取り組んでみる事にした。

洛陽地区の西周土器に関する研究には、葉万松・余扶危氏等の論文があるが<sup>2)</sup>、基礎的資料が少なく、絶対年代の決め手に欠けている。葉万松・余扶危氏等の編年は、洛陽北窯村西周遺跡の分期を基本として、河南中原地区の土器を早期・中期・晩期の3時期に分けたものである。この編年はあくまでも相対的なもので、実年代との噛み合いがはっきりしていない。また、豊鎬地区の西周土器や青銅器が、5時期あるいは6時期に編年されている今日、3時期編年はあまりにも荒いと言わざるをえない。

豊鎬地区の西周土器の編年に当たっては伴出した青銅器やその銘文を基準に年代を考える事が可能であったが、洛陽地区では青銅器を伴出する好資料がない。そこで洛陽地区の西周土器を、先に編年を試みた豊鎬地区の土器や青銅器と比較する事によって年代を与えてみようと思う。豊鎬地区の土器に関しては5時期に分類する編年を試みたので<sup>3)</sup>、洛陽地区出土の土器についても5時期に

編年してみたい。

## 2. 洛陽地区の歴史と西周遺跡

洛陽地区では、いくつかの西周遺跡が発見されているが、発見された西周遺跡と古典文献を結び付ける事によって文献に見られる“王城・成周”の位置の推定も可能になってくる。

今日の洛陽市は、邙山の南麓、洛河の北岸に沿って東西約 20km, 南北約 5 km にわたって市街地が広がっている。洛陽市街地の東は焦枝鉄道付近に始まり、西は谷水鎮付近に至っている。洛河は洛陽市の南辺を西から東に向かって流れ、洛陽市のはるか東北でやがて黄河に合流する。また、邙山を流れ出た瀍河は、洛陽老城の東を南下し洛河に合流する。澗河は、王湾村・史家湾村の西より流れ出て王城公園の西側を南下して瞿家屯の南でこれもまた洛河に合流する。

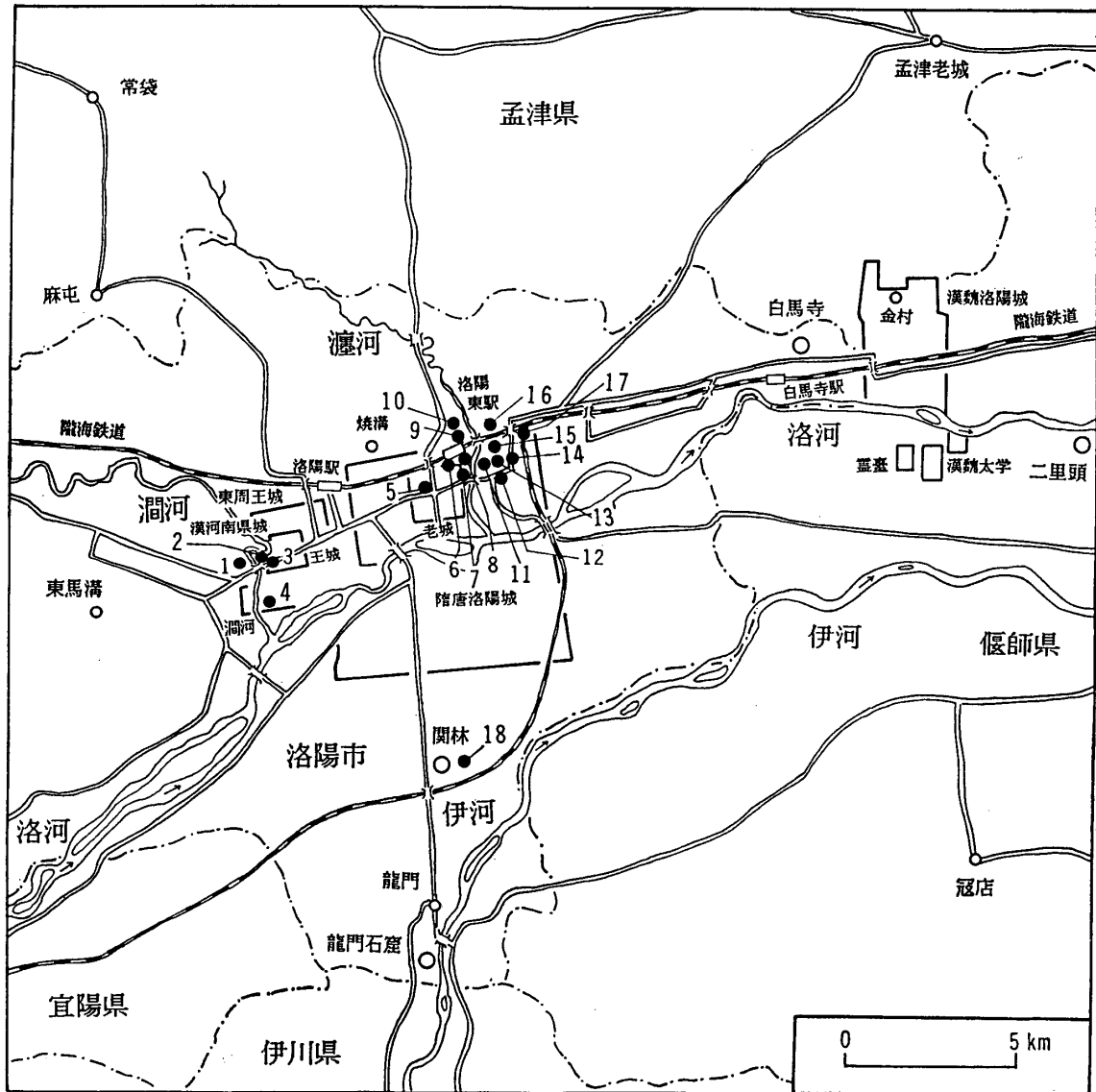
明代以来の洛陽老城は、瀍河の西岸・洛陽東駅の西南に位置し、この洛陽老城を北の中心として隋唐時代の洛陽城が洛陽市の南に向かって広がっている。隋唐洛陽城の西・洛陽駅の南西、澗河の東には、東周故城が位置し、この東周故城の中心部には漢河南县城の遺構が残るが、この付近に西周時代の王城の遺構が重なる可能性が高い。西周時代の諸遺跡は、澗河と瀍河の両岸に顕著に分布する。

西周時代の遺跡としては、澗河の西岸に獣骨坑や貯蔵穴を含む西干溝遺跡（第1図の1）が存在する<sup>4)</sup>。報告されている西周遺跡としては最も西に位置する遺跡の一つである。澗河の東岸には、北から T203-M 3 号墓（第1図の2）<sup>5)</sup>・中州路西周墓群（第1図の3）<sup>6)</sup>・瞿家屯遺跡（第1図の4）<sup>7)</sup>が存在している。西周墓 T203-M 3 号墓は東周故城の城壁の下層に存在し東周故城の上限年代を決定する上で重要な遺構となっている。瞿家屯遺跡からは住居址と灰坑が発見され、西周時代の土器・石器・骨器が発見されている。中州路の10基の西周墓は洛陽地区における最も重要な西周墓資料となっているが、発掘された区域が道路幅に限られ、付近にはさらに多くの西周墓が存在したと推定される。

瀍河の東岸、洛陽老城の中心付近・中州路の北側・北大街の西では4基の車馬坑が発見され、青銅の轄・害・鏹・馬面などの車馬具が出土している（第1図の5）<sup>8)</sup>。1・2・4号車馬坑の残りが特によく、このような車馬坑の存在はこの地が西周時代の重要な土地であったことを物語っている。報告ではこれらの車馬坑の年代を西周前期に位置づけている。

瀍河の西側・洛陽老城の東北外・洛陽東駅の南側の北窯村龐家溝では、300基を越える西周墓が発見されたと伝えられている。1971年に瀍河の西岸・隴海鉄道の鉄道線路上で青銅器を伴出する1基の西周墓（第1図の8）が発見されたのを初めとして<sup>9)</sup>、1964年の調査では青銅器・灰釉陶器を含む副葬品を出土した5基の西周墓（第1図の7）が発見・報告されている<sup>10)</sup>。この付近では1963年12月から1964年2月にかけての調査でも15基の西周墓が発見されているほか<sup>11)</sup>、かつて1953年にも2基の西周墓が発見されている（第1図の6）。

瀍河の西岸・隴海鉄道の北側の北窯遺跡に於いても鑄銅遺跡を含む幾つかの西周時代遺構が発見



第1図 洛陽附近西周遺跡分布図

- |                 |                  |           |              |
|-----------------|------------------|-----------|--------------|
| 1 西干溝遺跡,        | 6 龐家溝遺跡 (1953年), | 11 西周窯址,  | 16 擺駕路口遺跡,   |
| 2 T 203-M 3 号墓, | 7 龐家溝遺跡 (1964年), | 12 泰山廟遺跡, | 17 焦枝線甲骨骨遺跡, |
| 3 中州路西周墓,       | 8 龐家溝遺跡 (1971年), | 13 東大寺遺跡, | 18 關林遺跡,     |
| 4 瞿家屯遺跡,        | 9 北窯鑄銅遺跡・西周墓,    | 14 東関遺跡,  |              |
| 5 西周車馬坑,        | 10 北窯遺跡,         | 15 下瑤村遺跡, |              |

されている。1973年から1974年にかけてのこの地の調査に於いては、住居址・灰坑・墓・祭祀坑などの遺構が発見され、あわせて土器・青銅器・陶範などの遺物が発見されている（第1図の10）<sup>12)</sup>。1975年から1979年の発掘調査では、洛陽東駅の北約700m付近で西周時代鑄銅遺跡が発見調査され、建築址・灰坑・窯・墓・獣坑などの遺構が報告されている（第1図の9）<sup>13)</sup>。この鑄銅遺跡の年代は出土した土器の年代から西周初年から穆王前後に至ると考えられている。洛陽東駅の北約300mでは1991年にも西周墓が発見されている<sup>14)</sup>。

瀧河東岸にも西周時代の遺跡は多い。1952年に瀧河の東岸・隴海鉄道の南側で泰山遺跡（第1図の12）・東大寺遺跡（第1図の13）・下塚村遺跡（第1図の15）など3箇所の遺跡が調査されている<sup>15)</sup>。これらの遺跡は殷後期から西周時代の遺構を含むものと推定されるが、特に下塚村遺跡・東大寺遺跡では殷末西周前期に属すると推定される墓が発見されている。瀧河の東岸・隴海鉄道の北側には擺駕路口遺跡（第1図の16）が存在する。1985年には泰山廟遺跡で4基の車馬坑が発見されている<sup>16)</sup>。ほかに瀧河の東岸・洛陽老城から500mの地点では西周時代の窯も発見されている（第1図の11）<sup>17)</sup>。瀧河東岸の東関遺跡（第1図の14）では5基の西周墓が報告されているが<sup>18)</sup>、1991年に洛陽林校で発見された西周墓（C3M200号墓）も東関遺跡に続く遺跡と推定される<sup>19)</sup>。隴海鉄道から南にのびる焦枝線の立体交差工事時に現場付近から若干の西周甲骨が発見されている（第1図の17）<sup>20)</sup>。

また、洛陽市博物館には関林出土と説明書のある若干の土器が展示されている。洛陽関林とあるから洛陽市の南の関羽を祀った関林近くの遺跡から出土した遺物と思われる（第1図の18）。これによって洛陽市内から龍門石窟へ向かう伊河の西岸にも西周時代の遺跡が存在している事が知られる。以上が洛陽地区における主要な西周遺跡の分布である。

1963年に陝西省宝鶏市賈村で発見された「何尊」と呼ばれる青銅器の内底には12行122字からなる銘文があり

佳王初遷宅于成周，復稟，武王豊福，自天……。

とあって「成周」の地名が見られるが、この文章は、成王が東都である成周を造営し、この時に武王に対し祭祀を行った記録を記載したものと考えられている<sup>21)</sup>。この成周の地名は、豊尊・豊卣・徳鼎などと呼ばれる他の青銅器の銘文にも見えている。

成王の時、周公旦が築いた雒邑に関して、『尚書』洛誥には、

周公……予惟乙卯朝至于洛師。我卜河朔黎水。我乃卜澗水東・瀧水西，惟洛食。我又卜瀧水東，亦惟洛食……。

とあり、また『逸周書』作雒に

周公……乃作大邑成周于土中。立城方千七百二十丈，郭方七十里。南繫于雒水，北因于邙山……。

とあり、これらの工事をすすめるために、殷民を使役した事が『尚書』召誥に見られ、

太保乃以庶殷，攻位于洛汭……周公乃朝用書，命庶殷侯甸男邦伯厥既命殷庶，庶殷丕作。

という。この成周の位置を後漢雒陽の地・王城を漢河南県の地とする説があるが、また一方、成周と王城を同一地点とする考えも存在する。

雒陽王城の名称が、最初に見られるのは『春秋左傳』の莊公二十一（前673）年の記事で、

春胥命于弭，夏同伐王城。

とある。その後、襄公二十四（前549）年には、

齊人城邾。〔杜預注〕邾王城也，於是穀雒闕毀王宮，齊叛晉欲求媚於天子，故為王城之。

と見られ、穀水と洛河が王城を破壊した事と、その修理が行われたことが述べられている。『春秋左傳』の昭公の二十二（前520）年・二十六（前516）年には、成周と王城の名称がならんで出てくる。

昭公二十二年：秋，劉子單子以王猛，入于王城。〔杜預注〕王城，郊鄆，今河南鼎也。

と、また

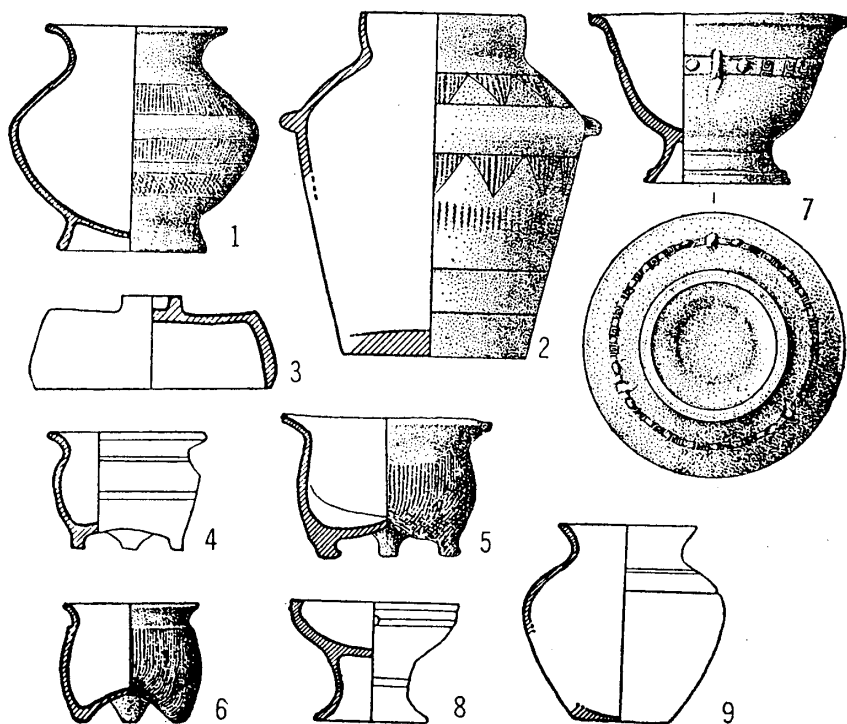
昭公二十六年：冬十月，天子入于成周。

これらの記事はいずれも東周時代のことで、西周時代に関する記事ではないが、東周時代には、王城と成周の認識が有ったと考えられる。

周公旦造營の東都である成周の位置は、洛陽の西周遺跡が最も濃厚に分布する地域に隣接していると考えべきである。筆者の「洛陽西周遺跡雜記」ですでに述べたところであるが<sup>22)</sup>、先記した洛陽市付近の西周遺跡の分布から考えると、成周の位置については、墓・車馬坑・窯・鑄銅所・灰坑・獣骨坑など西周遺跡の分布から、東は洛陽老城の北東・瀧河付近から、西は漢河南鼎城の西・澗河付近まで、北は邙山の南縁から南は洛河までの位置と推定するのが合理的である。西周維岳の王城の位置に関しては、金文にそのものずばりの「王城」の文字記載がなく、古典文献からの研究に頼らざるを得ないが、同じく西周遺跡・遺物の分布から考えれば、その位置に関してはやはり瀧河付近から澗河付近の間、邙山南縁から洛河の間以外には求められない。成周・王城の何れもが瀧河付近から澗河付近の間、邙山南縁から洛河の間と推定すると、限られた地域に二つの城が存在したことになる、それぞれ別の都城であったとは考え難く、王城は成周の一部を形成している物と考えざるをえない。

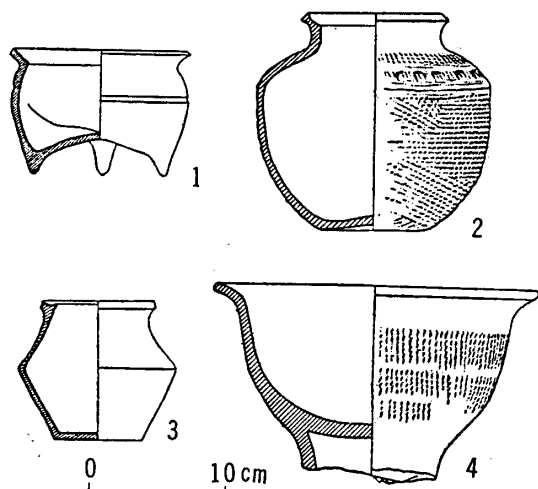
### 3. 洛陽地区出土土器の編年

成周・王城が造営されたであろう洛陽地区では、先に紹介した多数の遺跡が発見されている。これらの遺跡からは、相当量の西周土器が発掘されていると推定されるが、発掘報告が出版され土器の実測図や写真が掲載され、我々の目に止まる資料は決して多くはない。代表的な資料としては、



第2図 土器 下埝村遺跡 M167号墓出土，1甗，2甗，3蓋，4・5・6鬲，7簋，8豆，9罐

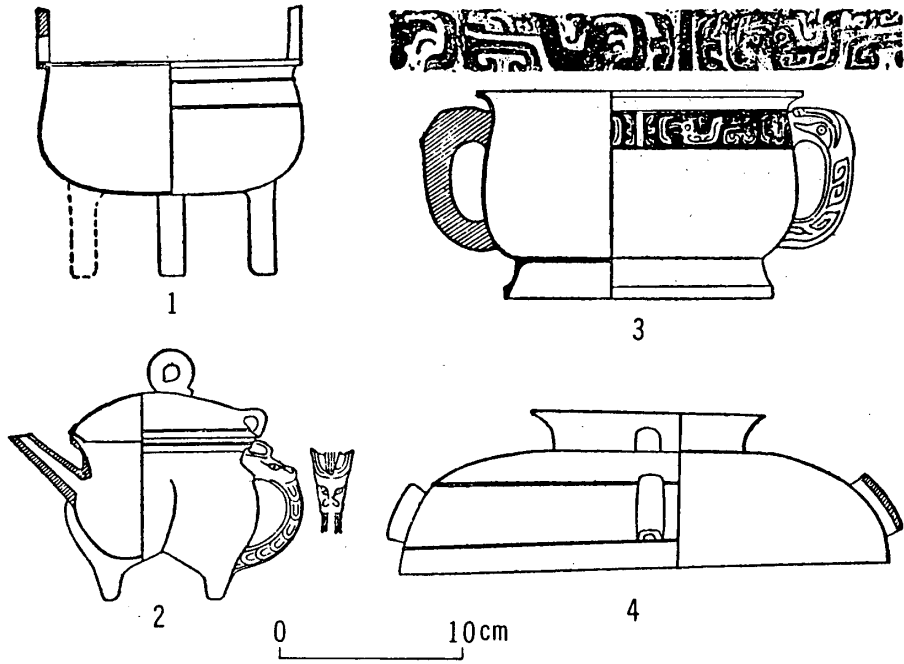
洛陽中州路発見の西周墓から出土した資料，洛陽西干溝遺跡・瞿家屯遺跡出土の資料，洛陽北窯村遺跡出土の土器資料，洛陽東関遺跡出土の土器資料などがある。第1表に洛陽地区西周墓の中で土器の副葬されていた墓とその土器の器形を示してみた。出土している土器の器形は，圧倒的に罐が多く，ついで鬲と簋があり，豆も比較的多い。青銅禮器が副葬された西周墓も少なくはないが，青銅禮器と副葬陶器が伴出する例は少なく，多くの場合，青銅器と伴出する土器の器形は罐か豆の何れか1種のみであった。従って，洛陽地区では伴出した青銅器から土器の年代を考える事はほとんど不可能である。



第3図 土器 中州路 M211 号墓出土

洛陽地区西周第1期の土器を選出し，決定する手がかりは，殷墟第4期文化の土器との連続性，あるいは豊鎬地区の西周第1期土器との類似性を求める以外，有効な手段が見あたらない。西周第1期の標準としては，中州路のM211号墓出土の土器を取り上げる事が出来る（第3図）。このM211号墓からは鬲2個，簋2個，罐5個の副葬陶器が出土している。中州路の報告では，M211号墓出土の陶鬲が，殷周間の遺物と推定される洛陽市東郊の下壩村M167号墓出土の鬲に類似する事を指摘し，さらにM211号墓出土の簋が洛陽老城東北門の西周初期のM6号墓出土の陶簋に類似すること<sup>23)</sup>，M211号墓出土の罐が下壩村M167号墓の罐（第2図の9）に類似する事を指摘する。葉万松・余扶危両氏は，1986年の論文（『考古』1986年第12期）で中州路M211号墓，あるいは下壩村M161号墓を西周初年から康王時期の基準としているが，下壩村M161号墓は下壩村M167号墓などと並んで（第2図），中州路M211号墓より一時期早い殷末周初の過渡期に属している可能性が高い。洛陽市東関のC5M91号墓・C5M89号墓などは，中州路M211号墓と同一時期の西周第1期の墓と考えてよいであろう。

以上紹介してきた中州路M211号墓からは，先記したように，鬲2個，簋2個，罐5個の副葬陶器が出土しているが，この中州路M211号墓に若干先行する可能性のある下壩村M161号墓からは鬲2個，簋1個<sup>24)</sup>，甗4個，壘1個の土器が出土している。この甗・壘を罐の類と見れば，これらの墓の土器の組み合わせは鬲・簋・罐から成り立っていると言える。土器の組み合わせは，豊鎬地区と基本的に同じである。しかしながら，土器の器形は豊鎬地区の遺物とはかなり異なり，殷文化土器の伝統を強く受けていると見る事が出来る。洛陽の西周第1期の土器には，河南省安陽市の大司空村遺跡出土の鬲や簋に類似した遺物が存在する<sup>25)</sup>。たとえば洛陽東関C5M91号墓出土の鬲（M91：2）は大司空村の鬲（Ⅱ式，197：4）に類似する。また，中州路のM211号墓出土の鬲（第3図の1）は大司空村の鬲（Ⅲ式，135：1）に近いといえる。今までのところ洛陽地区では，高領



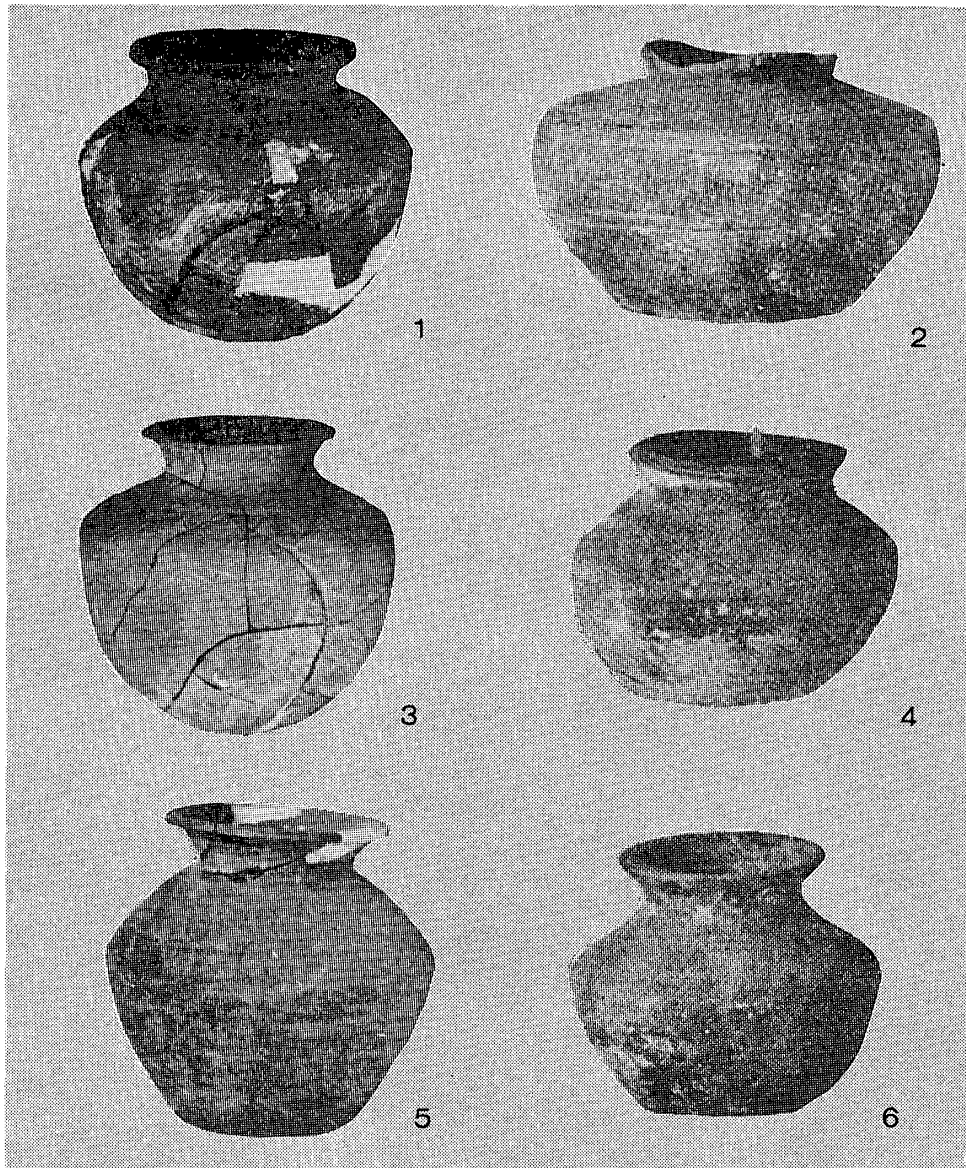
第4図 青銅器 中州路M816号墓出土



第5図 青銅器 中州路M816号墓出土

乳状袋足分襠鬲の類は発見されておらず、また、洛陽地区の西周第1期の鬲は脚の退化が著しい分襠鬲系の器形が多いなど、豊鎬地区とは際立った差を見せている。

北窯村出土の簋（『文物』1981年第7期，57頁）について言えば、簋の器形の多くが殷墟文化の簋の器形の伝統を受け継いでいると見られる。たとえば北窯村F3号住居址出土の簋（F3：4）



第6図 土器 中州路M816号墓出土

(第15図の7)は殷墟苗圃北地遺跡出土遺物に類似する<sup>26)</sup>。中州路のM211号墓出土の高圈足の簋(第3図の4)に近い器形の簋は、豊鎬地区に於いては張家坡72号墓の遺物(『考古学報』1980年第4期, 図版15—5, 72:2)など、まれな例として第1期に見られるが第2期以降は衰退したようである。しかし洛陽地区では高圈足の簋が第5期まで連続して存在したようである。

洛陽市東関C5M91号墓出土の圈足尊(『中原文物』1984年第3期, 26頁, 図3—17)も殷墟に多く見られる遺物で、やはり苗圃北地遺跡出土の圈足尊(『殷墟発掘報告』図119—3・4)などに祖形が求められる。

以上紹介してきた諸理由からこの洛陽地区第1期の土器が西周時期の最も早い時期に属することは明らかであるが、絶対年代・実年代に関して、以上の検討では不明と言わざるをえない。

筆者は「西周土器の編年研究……豊鎬地区の土器」の中で豊鎬地区西周土器の5時期編年を試み、



西周時代をおよそ 250 年間と考え、1 期約 50 年間と推定して各時期に年代と西周王名をあたえてみた<sup>27)</sup>。豊鎬地区の土器の年代観では、旅鼎・大孟鼎・禽簋等の青銅器の年代に土器を結びつけ豊鎬地区の第 1 期を武王・成王・康王時代と考えたが、その年代観を洛陽地区西周土器編年に移行させ、次にくる洛陽地区の第 2 期が昭王・穆王時代に属する事がほぼ確実なことから、洛陽地区の第 1 期に昭王以前の年代を与えると、第 1 期は武王の晩年を含んで成王・康王時代と推定されてくる。

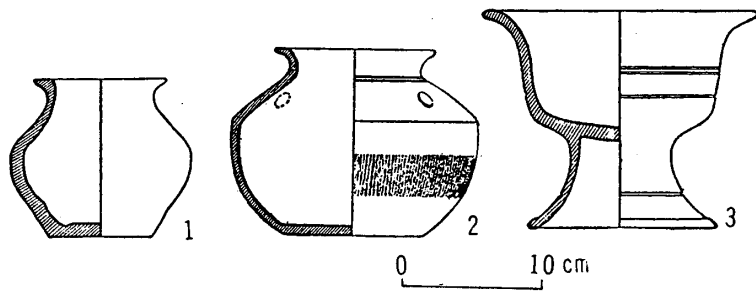
洛陽地区の西周第 2 期の基準は中州路 M816 号墓出土の土器である。M816 号墓は棺槨と腰坑を有する長方形竪穴墓で、副葬品として青銅の盤（器蓋）1、簋 2、鼎 2、盃 1 点が出土し（第 4・5 図）、また土器としては円底罐 3（第 6 図の 1・2）、平底罐 11 点が出土している（第 6 図の 3～6）。円底罐は口縁が丸く外反し、肩が張り、器身に縄紋が施される。中州路の報告書では平底罐を五つの型式に分類しているが、多くは口縁が“く”の字に外反し、肩が折れ、弦紋・縄紋が施されている。青銅盃の器形は脚が鬲形で、筒状の注口、獸首形の把手がつき、把手には鱗紋が施される。盃の蓋は環形の鈕がつく。蓋は盤形で円形の鈕がつき盤として用いられていたと言う（第 4 図の 2・4、第 5 図の 3・4）。この青銅盃は、鎬京の地とされる陝西省長安県普渡村の長白墓出土の青銅盃に類似している<sup>28)</sup>。また中州路 M816 号墓出土の 2 点の弦紋青銅鼎（第 4 図の 1、第 5 図の 1）は若干の大小の差はあるが器形は概ね同じで、器身の下方が下膨上に広がっている。このような様相は、長白墓出土の 2・3・6 号青銅鼎にも認められる。鎬京の長白墓の年代は、西周の穆王時代とされている。従って中州路 M816 号墓の年代及び出土の罐の年代も穆王時代と考えてよいであろう（第 15 図の 12・13）。陶罐の類は全時代を通じて共通の器形が認められ、陶罐の器形をもって最終的な時代決定を下すのは難しいが、確かに M813 号墓出土の陶罐（第 6 図の 5・6）には、長白墓出土の陶罐（『考古学報』1957 年第 1 期、図版 5—3）との類似性が認められる。

洛陽市東関遺跡の C 5 M88 号墓出土の鬲（第 15 図の 10）に関しては、東関遺跡の報告書で穆王時代の遺物とするので第 2 期に入れた<sup>29)</sup>。東関遺跡の C 5 M90 号墓出土の豆（第 15 図の 15）も同じ時期と仮定し第 2 期に入れた。

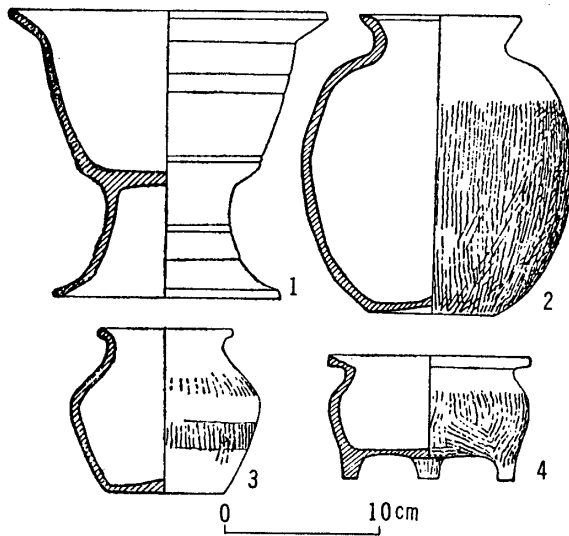
豊鎬地区の土器編年では、豊鎬地区の西周第 2 期を昭王・穆王時代と考えたが、洛陽中州路 M816 号墓の青銅器の年代も穆王時代の遺物と推定される。従って洛陽地区の第 2 期も昭王・穆王時代と推定して概ね間違いは無いものと思われる。

洛陽地区の第 3・4・5 期の年代に関しては、年代を決める手がかりが特に希薄である。西周時代最後の資料として、葉万松・余扶危氏等は河南省陝県上村嶺虢国墓地の土器を引用している。上村嶺虢国墓地を除いてこの時期の好資料は無いが、洛陽から上村嶺までは西へ約 120km の距離があり<sup>30)</sup>、上村嶺虢国墓地出土の土器を洛陽地区出土の土器と同一に扱う研究方法には問題がある。

洛陽西周第 3 期の土器は、良好な組み合わせを持った一括資料を欠くが、第 2 期と第 4 期の中間資料として、間を繋ぐ意味で洛陽西干溝 H824 号・H838 号灰坑出土の鬲（第 15 図の 16・17）、洛陽中州路 M123 号墓の罐・簋（第 7 図、第 15 図の 18・19）、西干溝 H809 号灰坑の盆（第 15 図の 20）を示してみた。西干溝 H824 号の鬲（第 15 図の 16）は連襠鬲で脚の先端まで縄紋が施されるなど典型



第7図 土器 中州路 M123号墓出土

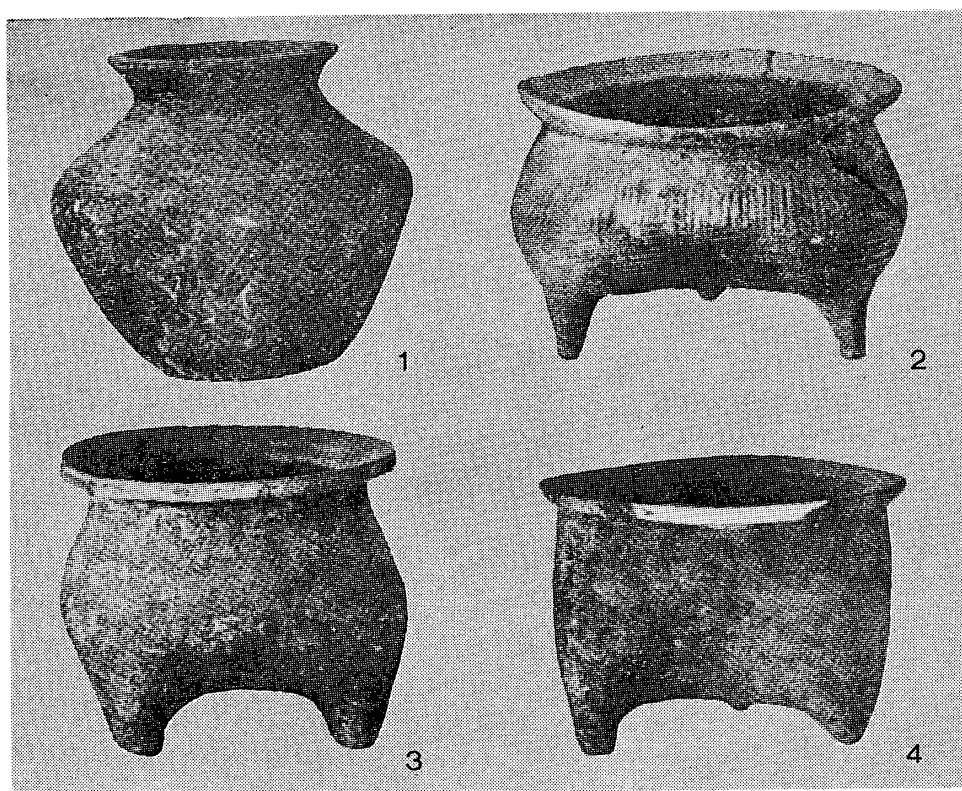


第8図 土器 洛陽王城 T203-M3号墓出土

的な西周土器の要素が認められ、また、口縁が“く”の字形に外折し（斜沿）、西周中期の特色を示し、第4期の“L”字形の口縁とは異った姿を呈している。西千溝 H838号灰坑出土の鬲（第15図の17）は、鬲と呼

ぶよりは鼎と呼ぶべき器形かもしれない。釜に実足の脚が付いた器形であるが、口唇部外沿が直立し、殷の鬲的な器形をとどめているが、また、腹部に扉稜が存在し、俗に西周中期以降と言われる特色を示す。第15図の16・17の鬲は、口縁部の特色と扉稜の存在において西周中期の典型的要素を持っていると言える。第3期の鬲は、第1・2期の殷文化的な鬲に比較してより濃厚に西周文化の土器的な要素を示し出す。この西周中期的要素はこれらの鬲を洛陽地区の5期編年の中心である第3期に持ってくる根拠となるであろう。

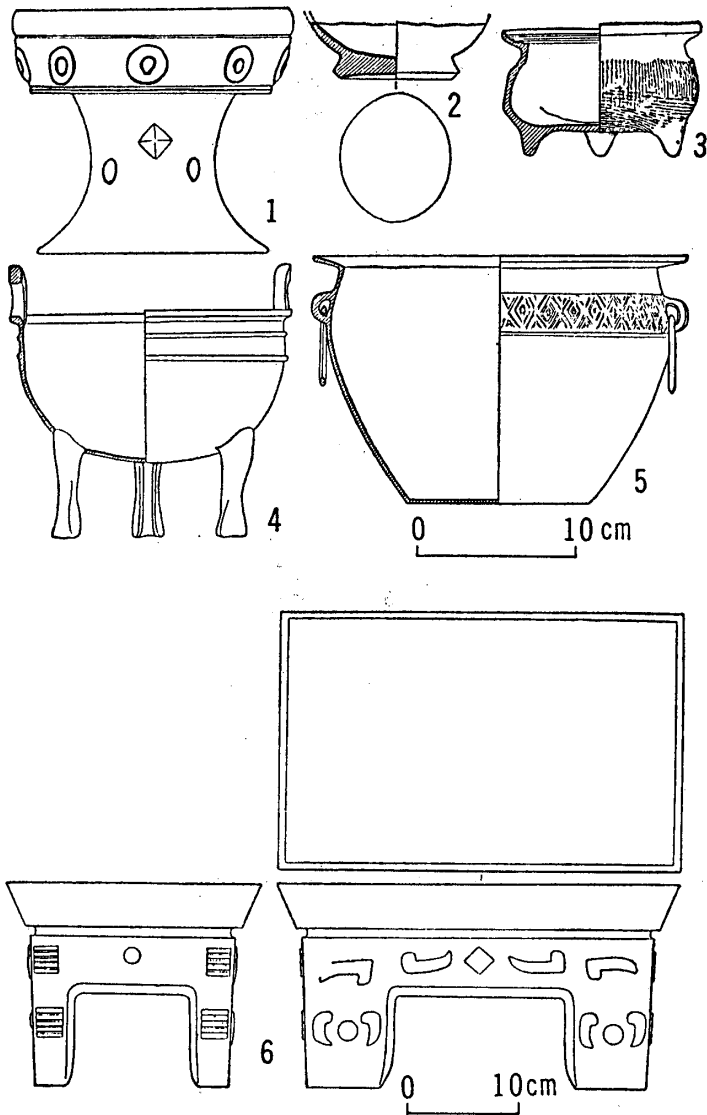
第3期の罐と簋を出土している中州路 M123号墓は長方形竪穴墓で、墓室は長さ3m、幅1.64m、深さ5mで、槨、棺、腰坑を有している。副葬品としては平底罐6点、簋2点、鬲2点の土器が出土している（第7図）。中州路M123号墓出土の土器を第3期に属する遺物とする根拠は罐と大圈足簋の器形変化の流れによって、M123号墓の土器器形が第2期中州路M816号墓出土の罐（第15図の12）と第4期の洛陽王城 T203—M3号墓出の罐・簋の中間にくる器形と考えられるからである。第3期の土器として第15図に示した土器の相対的年代には大きな誤りは無いものと考えている。問題は実年代・絶対年代である。第3期は豊鎬地区の土器編年に移行させると共王・懿王・孝王時代に比定されるが、豊鎬地区の第3期は陝西省扶風県上康村2号墓出土<sup>31)</sup>の懿王・孝王時期とされる青銅器や上海博物館蔵の共王時代とされる十五年趙曹鼎などの年代を基準にその時期の土器に年代を与えている。洛陽地区の土器そのものには年代を決定する遺物の決め手がない。ただ第3期に先行する第2期が確実に穆王時代を含む事、後の第4期が土器の器形からみて豊鎬地区の第4期つまり夷王・厲王・共和の時代に確実に併存する事から、洛陽地区の第3期を共王・懿王・孝王の時代と推定することが可能である。



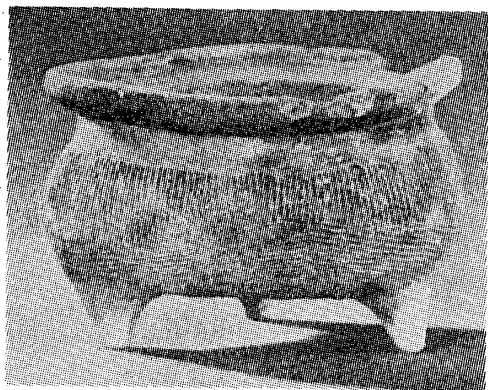
第9図 土器 中州路 M640号墓出土

洛陽地区の第4期の標準資料として洛陽王城の T203—M3号墓の土器を取り上げたい<sup>32)</sup>。この M3号墓からは、鬲1・簋1・罐2点の土器が発見されている(第8図)。この鬲は平底で短い柱状の足が付いている。これらの土器を豊鎬地区の土器に比較すると第4期に属する張家坡遺跡の 67S C C M160号墓出土の鬲や罐に類似しているといえる<sup>33)</sup>。従って洛陽地区に於いても第4期に入れてみた。張家坡67S C C M160号墓出土のⅥ式鬲(『考古学報』1980年第4期, 484頁, 図29—2)は平底で柱状の足が付き腹部に縄紋が施されるなど洛陽の T203—M3号墓の鬲に似ている。T203—M3号墓の平底罐は器身が低く肩部が張り、広口、平底で、この罐も張家坡67S C C M160号墓のⅨ式罐(『考古学報』1980年第4期, 484頁, 図29—6・7)に類似する。T203—M3号墓から伴出した深腹罐・簋も第4期に並べてみた。鬲・罐の器形が豊鎬地区の第4期の土器器形に極めて類似するところから、洛陽地区のこの第4期の年代を豊鎬地区の第4期と同じに考え夷王・厲王・共和の時代に比定してみた。

洛陽地区の西周第5期の標準資料として洛陽中州路のM640号墓を示した。M640号墓は長方形竪穴墓で、墓室は長さ3m, 幅1.61m, 深さ5.4mの大きさであった。槨, 棺, 腰坑を有していた。副葬品として、平底罐3点, 簋2点, 鬲3点の土器が出土している(第9図)。M640号墓を第5期とするその根拠は、平底の鬲(第9図の2, 第15図の28)が豊鎬地区西周土器編年の第5期の鬲(『考古学報』1980年第4期, 486頁, 図31—3)に酷似することにある<sup>34)</sup>。第9図の4の鬲(第15図の27)は、口唇部が直角に外折し(折沿)、西周晩期の様相を呈し、平底に近い連襠で袋足は短い。口



第10図 土器・青銅器・漆器 1漆豆, 2漆杯, 3陶鬲, 4青銅鼎, 5青銅鑑, 6漆俎, 張家坡M115号墓出土



第11図 陶鬲 張家坡M115号墓出土

径13.5cm, 高さ9.8cmの大きさである。第9図の2の鬲(第15図の28)は、口縁が“く”の字に外折し平底で腹部に縄紋が施され、口径13.1cm, 高さ8.3cmである。この鬲は先記したように澧西地区の67S C C M 115号墓出土の陶鬲に極めてよく似ている(第11図)。

張家坡67S C C M115号墓からは青銅鼎・盂, 陶鼎, 漆器豆・俎・杯などの副葬品が発見されている(第10図)。M115号墓の青銅鼎は、器身が半球状で、口縁部に2条の弦紋を有し、西周末の形を呈している。この青銅鼎(第10図の4)は陝西省出土と言われる青銅弦紋鼎(此鼎甲・丙)に類似し<sup>35)</sup>、器身が此鼎甲・丙よりは若干深いが同一時期の遺物と考えたい。此鼎甲・丙は宣王時期の遺物と考えられているが、67S C C M115号墓の青銅鼎も同一時期と考えて好いであろう。またM115号墓

出土の青銅盂(第10図の5)は、両側の耳に銜環を有し、このような銜環は春秋時代の鑑・甑などによくみられ春秋時代に近い遺物と見てよいであろう。M115号墓の漆豆の器形は、陝西省宝鸡県西高泉村遺跡の西周末・春秋初頭のM1号墓出土の青銅豆に類似し<sup>36)</sup>、その時期の遺物と考えられる。以上の年代観を根拠にして中州路のM640号墓を西周第5期に属する遺構と考えたい。

第15図の30・31は洛陽西干溝遺跡出土の盆と豆で

第1表 洛陽西周墓および出土土器一覧表

遺跡名	墓号	年代	文献	罍	罐	簋	盆	豆	壺	罍	尊	卣	觚	解	爵	蓋	備考
王城T203	3	西周4	洛陽発掘報告	1	2	1											罍 = 孟
下塙村	156	殷西周	考古学報9冊	1	1	1											鉛戈1
下塙村	160	殷西周	考古学報9冊	2		1			1								罍 = 罐
下塙村	161	殷西周	考古学報9冊	1	4	1											罍 = 罐
下塙村	162	殷西周	考古学報9冊	1	2	1											罍 = 罐
下塙村	164	殷西周	考古学報9冊	7	1	1			1							2	罍 = 罐
下塙村	167	殷西周	考古学報9冊		6	2		2									罍 = 罐
下塙村	169	殷西周	考古学報9冊		1	1											青銅鼎 罍蓋尊爵觚解 11
鋼鐵工地		西周	考古1959-4		4												
中州路	123	西周3	洛陽中州路	2	6	2											
中州路	211	西周1	洛陽中州路	2	5	3											
中州路	403	西周	洛陽中州路		1												
中州路	404	西周	洛陽中州路	1													
中州路	506	西周	洛陽中州路		2	2											
中州路	640	西周5	洛陽中州路	3	3	2											
中州路	816	西周2	洛陽中州路		14												青銅鼎 罍蓋 6
中州路	196	西周1	洛陽中州路	1	4	2		2			1		1				鉛器 爵解 3
鐵路分局		西周2	中原文物1984-3	1	10	2								1			攪乱
東関	88	西周2	中原文物1984-3	2	5	1		1			1		1				盗掘
東関	89	西周1?	中原文物1984-3	1	1	1											盗掘
東関	90	西周2	中原文物1984-3	2	5	1		1			1						盗掘
東関	91	西周1	中原文物1984-3	2	5	1		2									盗掘
東関	92	西周2?	中原文物1984-3	1	1	2		1									盗掘
東大寺	101	殷西周	考古学報9冊	1	1							1		6			
東大寺	102	殷西周	考古学報9冊	1	1												
東北門	3	西周	考古通訊1956-1	5	5	3		2			1						鉛器鼎 尊卣爵觚解 8
東北門	6	西周1	考古通訊1956-1	5	9			1								2	陶豆は灰釉陶
北窯村	14	西周	文物1981-7	2	2	2	1		1								
林校	200	西周	文物1992-3	3	14	3		4									
龍家溝	1	西周1?	考古1972-2		1												
龍家溝	54	西周	文物1972-10			1		1			1						青銅鼎 罍蓋卣爵觚解 9
龍家溝	139	西周	文物1972-10			1		1			1						陶豆は灰釉陶, 青銅鼎 罍蓋 3
龍家溝	202	西周	文物1972-10			1		1			1						陶豆は灰釉陶, 青銅鼎 罍蓋 49
龍家溝	410	西周	文物1972-10			1		1			1						陶豆は灰釉陶, 青銅鼎 罍蓋 6

ある。報告書はこれらの土器を陝西虢国墓と同じ時期の西周晩期の土器とする見解を示しているが、ここではそれに従って西周第5期の遺物とした。

洛陽地区の第5期は豊鎬地区の土器編年に移行させると、張家坡 67S C C M115 号墓出土の青銅鼎・盃の年代から宣王・幽王時代と推定される。

洛陽地区の西周墓の副葬陶器の組み合わせの基本は、第1表が示しているとおりの西周全時代を通じて鬲・罐・簋から成っている。一方、豊鎬地区に於いては第1・2期の組み合わせは鬲・罐・簋から成るが、第3・4・5期の組み合わせは鬲・罐・盆に変化している。この点が洛陽地区と豊鎬地区の副葬陶器組み合わせの大きなちがいである。洛陽地区に於いても盆は見られないわけではない。たとえば西干溝遺跡では第3期以降盆が見られるが、副葬品としては利用されていない。同じ西周王朝の文化でありながらどうしてこのような違いが有るのであろうか大変興味深いところである。この問題の一つの答えとしては、豊鎬地区の土器は先周文化の伝統のもとに西周土器として第1期から第5期へ変遷をとげているのに対して、洛陽地区の土器は殷式の土器を母体として、西方の西周土器の影響を受けながら第1期から第5期へ徐々に周式土器に変化していった事実を指標としてよいであろう。

#### 4. 洛陽地区出土の灰釉陶器

西周時代の諸遺跡からは、度々灰釉陶器の類が発見されるが、西周墓に副葬品として納められた物が多い。この種の陶器は原料に白陶土（高嶺土）を用い、高温焼成に耐え（1200度前後）、器の表面には青灰色の釉が掛かり、このような理由から中国において“原始瓷器”の名称でも呼ばれている<sup>37)</sup>。灰釉陶器が発見された代表的な遺跡には、洛陽市龐家溝遺跡、河南省濬県辛村遺跡、陝西省長安県普渡村長白墓、河北省房山県琉璃河遺跡、安徽省屯溪遺跡、江蘇省句容県浮山果園遺跡などが知られるが、出土数量からは洛陽龐家溝・安徽屯溪・江蘇浮山果園などの遺跡が特に注目される。また、最近の新聞報道では、周原で大量の灰釉陶器が発見された事が報じられている<sup>38)</sup>。

洛陽市龐家溝遺跡出土の灰釉陶器の器形には、鬲・尊・罐・簋・豆などの器形が存在する<sup>39)</sup>。第12・13図に示した写真は筆者が中国歴史博物館・洛陽博物館・河南省博物館にて撮影した灰釉陶器で、研究資料として必ずしも良好な写真ではないが、華北に於けるこの種の灰釉陶器の発表資料が少ないのでここに示しておく。

第12図の1は高さ11cmほどの四耳有肩尊である。1991年9月に中国歴史博物館で見た遺物で、洛陽市龐家溝出土と説明があった。青灰色の灰釉の掛かり具合は比較的均一で、胎土は硬い物と思われる。肩が折れ、圈足がつき、肩部に四つの鈕（耳）がつく。2も口径24cmの四耳有肩尊で、1の器形に類似する。洛陽博物館の収蔵品である。『文物』1972年第10期に遺物番号M139:20として写真が示された遺物に類似し、肩上、口縁部に平行弦紋が施されている。3も洛陽博物館の収蔵品の有肩尊で高さ23cmほどで、傾斜する肩部に平行弦紋が施される。器身全体に灰釉が掛かり焼成状態は極めて好い。これらの有肩尊に類似した遺物は、濬県辛村遺跡の西周墓からの出土例も

知られ<sup>40)</sup>、華北で広く利用された器形と推定される。

4は洛陽博物館の収蔵品の小尊（小壺）で、高さ 4.5cm ほどの極めて小型の遺物である。豆盤内に置かれた遺物である可能性が高い。

5は洛陽博物館の収蔵品の罐（甕）で高さ 60cm ほどの遺物である。器身は球形を呈し口縁は鋭く外折する。宝鶏市紙坊頭遺跡出土の灰釉陶罐の器形に類似する<sup>41)</sup>。6も洛陽博物館の収蔵品の罐（甕）で、これは高さ 28cm の小型の遺物で、『文物』1972年第10期に遺物番号M139:20として報告された遺物である。器身は球形を呈し、口縁は直立し、比較的厚い灰釉が掛かる。これらの甕に類似した遺物は濬県辛村の灰釉陶器中にも存在し、とくに第12図の5と口縁部が同形の甕が辛村の遺物に認められる。

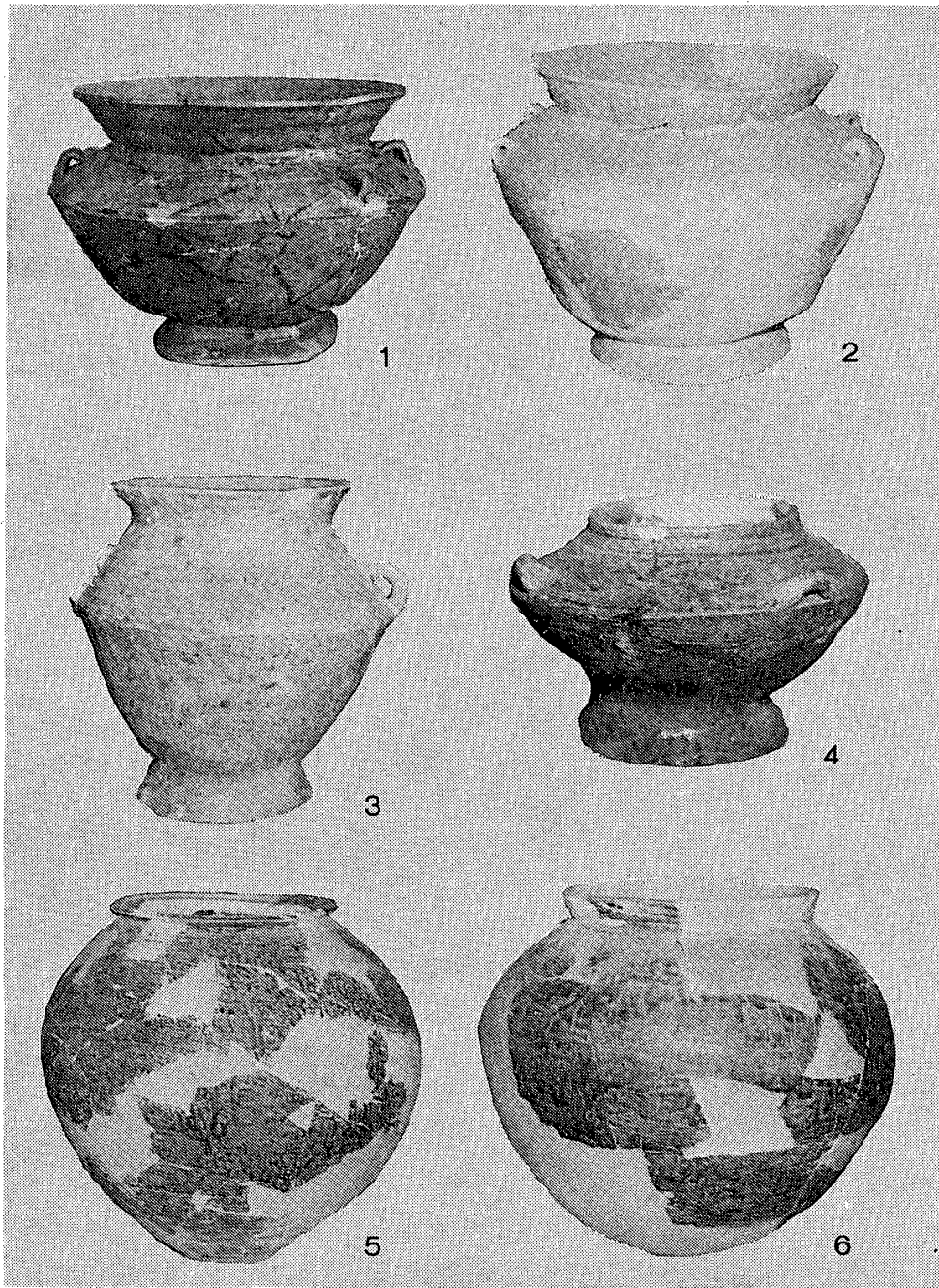
第13図の1・2とも洛陽博物館収蔵の灰釉陶簋である。1は口径 18cm ほどの大きさである。2は『文物』1972年第10期に遺物番号M202:1として報告された簋で、高さ 15.5cm の大きさである。龐家溝遺跡のM54号墓から同型の遺物が出土していると言う。

3・4は洛陽博物館収蔵の灰釉陶豆である。3は口径約 12cm、4は口径約 13cm の大きさである。5は中国歴史博物館で1991年9月に撮影した洛陽出土の灰釉陶豆で、盤の直径は約 11cm ほどである。6は『文物』1972年第10期に遺物番号M54:2として報告された豆で、高さ 9cm、盤上に小尊（小壺）が乗る。この種の灰釉陶豆は出土例が多く、濬県辛村の西周墓からも幾つか出土している。

このほかにも洛陽地区からは多くの灰釉陶器が出土し、龐家溝遺跡のM202号墓から発見された灰釉三角帯紋甕（第14図の1）は特に有名である。同時代の青銅甕の器形を移した遺物で肩部が張り、深腹である。肩部には2本の弦紋に挟まれた3段の三角紋帯がある。河北省房山県琉璃河遺跡や河南省襄県から類似した器形の灰釉陶甕（第14図の2）が出土している<sup>42)</sup>。

洛陽地区の西周墓から出土している灰釉陶器の器形は、豆が圧倒的に多く、外に罐・簋・甕・尊の器形が見られ、基本的な組み合わせは簋・豆・甕または尊とみられる。資料例は少ないが、龐家溝M54号墓やM202号墓に見られる簋・豆・甕から成る組み合わせが一般的で基本でもあるようである。灰釉陶器を副葬陶器に使用する場合は簋・豆・甕または尊の組み合わせは、灰陶の副葬陶器の鬲・罐・簋の組み合わせとは異なる。西周期の青銅器の組み合わせは複雑であるが、鼎・簋・尊・卣・爵などからなり、灰陶や青銅器の場合は、三足の鬲や鼎が組み合わせの中心と成っている。これに対して、灰釉陶器の組み合わせには三足器が無く、灰釉陶器の器形自体に三足器を見ない。

これら洛陽地区出土の灰釉陶器の器形には、一部に青銅器の器形を写したと思われる器形が存在する。第12図の1～3の有肩尊は西周青銅器の器形を真似ているとみてよいであろうし、第14図の甕も青銅器の甕の器形を写したものである。灰陶や青銅器の器形を模倣しているにもかかわらず、西周禮制上、禮制陶器や青銅器の中で最も重んじられる三足器が、灰釉陶器の中に存在しないのはいかなる理由によるのであろうか。灰釉陶器の器形は、基本的に青銅器の器形を写していて、そのために鬲が見られないのであろう。灰釉陶器の器形に鼎が存在しないのは華北の灰釉陶器の発見例

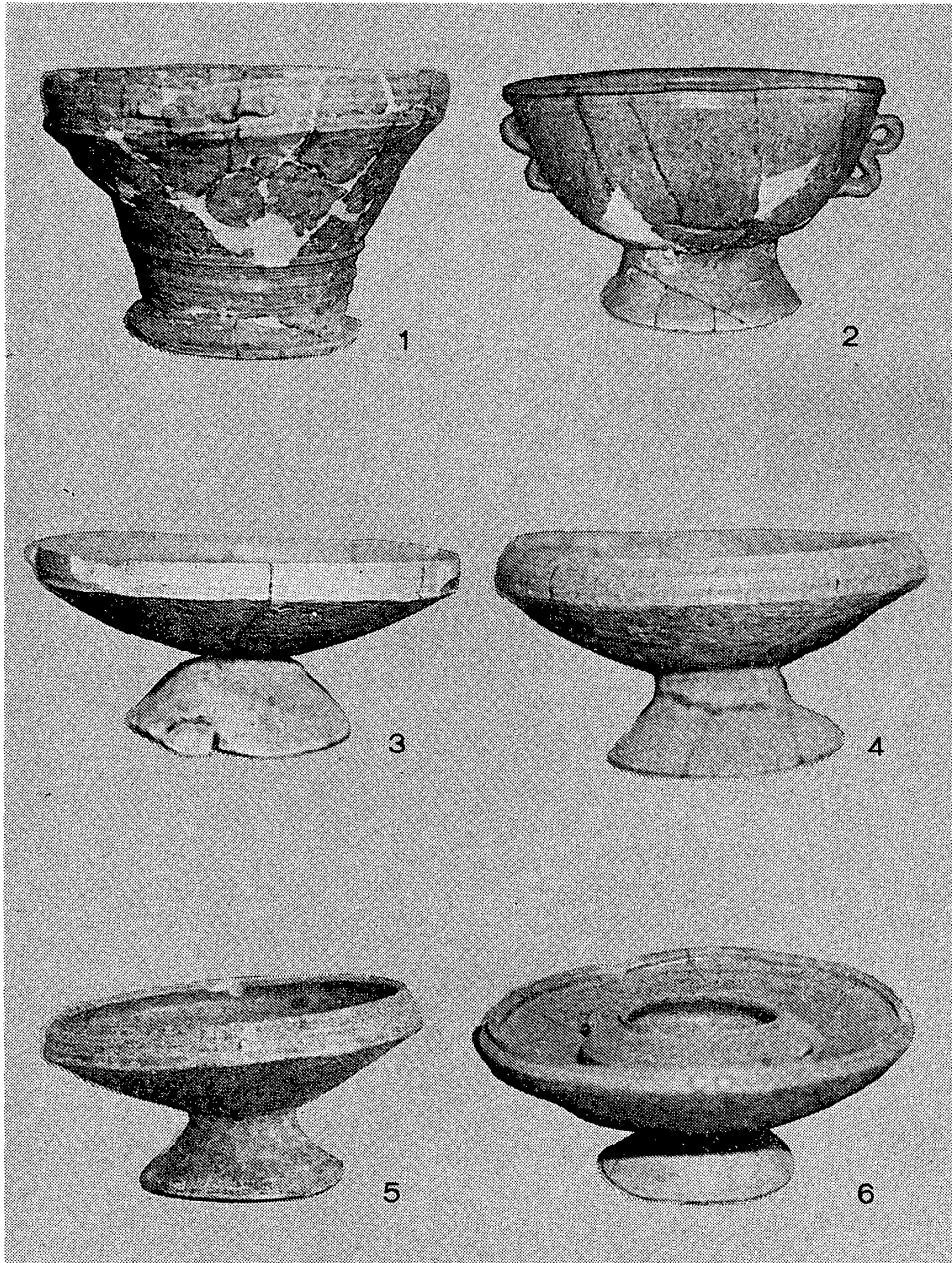


第12図 灰釉陶器 洛陽地区出土

がまだ少ない事によるもので、豊西張家坡遺跡 M202 号墓の灰陶列鼎の例から考えて灰釉陶器の鼎が存在しても不思議ではないと思われ、多分今後発見されると考えておいてよいであろう。

以上の洛陽地区出土の灰釉陶器は、華北で生産された遺物と考えてよいであろう。洛陽地区の灰釉陶器は一般に胎土が硬く、釉の掛かりが均一で、陶器の表面がよくしまり、無紋に近い遺物が多い。このような灰釉陶器は、河北省・陝西省・甘肅省の地域からも発見されている。特に龐家溝M202号墓・河南省襄陽霍莊・河北省房山県琉璃河 M52 号墓の3個所の遺跡から発見された灰釉壺の類似性は、万人の認める所と思われ、長江流域には見られない器形でもある。





第13図 灰釉陶器 洛陽地区出土

また洛陽地区出土の灰釉陶器は当然の事として、鄭州・洛陽地区の殷代灰釉陶器の伝統を受け継いでいるものと推定される。殷墟文化の灰釉陶器の器形としては、豆・壺（有肩尊）などの器形が知られるが、洛陽地区の灰釉陶器の器形である豆・有肩尊は殷墟文化の灰釉陶器器形の伝統を守っていると見てよいであろう。

これにたいして、長江流域以南の安徽屯溪・江蘇浮山果園・浙江六石などの灰釉陶器の器形には、罐・豆・尊・盃・盂・盞などの器形が見られる。安徽省屯溪遺跡出土の灰釉陶器は、胎土が軟らかく、釉の掛かりが不均一で釉が脆く腐っている物が多く、また、紋様に沈線平行紋、沈線方格紋、櫛目紋を多用した遺物が見られるなど、この地方の特色が認められる。

第2表 西周墓灰釉陶器出土一覧表

遺跡名	墓号	年代	地域	文献	罐	簋	豆	壘	尊	盂	盃	碗	盤	蓋	備考
龐家溝	1	西周	河南洛陽	文物1972-10			1								
龐家溝	54	西周	河南洛陽	文物1972-10		1	1		1						小壺=尊
龐家溝	139	西周	河南洛陽	文物1972-10	1		1		1						壘=尊, 甕=罐
龐家溝	202	西周	河南洛陽	文物1972-10		1	1	1							
龐家溝	410	西周	河南洛陽	文物1972-10				1							
東北門	6	西周	河南洛陽	考古通訊1956-1				2							
辛村		西周	河南濬県	濬県辛村	1	1	5	1	5						3 写真教, 甕=罐
霍莊		西周 1	河南襄県	文物1977-8				1							青銅鼎簋尊卣爵觶 7
琉璃河	52	西周 1	河北房山	考古1974-5				3	1						罐=壘
賀家村	6	西周 1	陝西岐山	考古1976-1				1							
長白墓		西周	陝西長安	考古学報1957-1				3							
紙坊頭	1	西周	陝西宝鶏	宝鶏強国墓地	1										
茹家莊	1	西周	陝西宝鶏	宝鶏強国墓地	1			2							
白草坡	2	西周 1	甘肅靈台	考古学報1977-2	1		1								
屯溪	1	西周 5	安徽屯溪	考古学報1959-4	10		32		7	5	5	9			
屯溪	2	西周 5	安徽屯溪	考古学報1959-4								2	1		
煙墩山		西周	江蘇丹徒	文物参考資料1956-1				2				1			
浮山果園	8	西周	江蘇句容	考古1977-5				3							
浮山果園	7	西周	江蘇句容	考古1977-5				3							
浮山果園	6	西周	江蘇句容	考古1977-5				3							
浮山果園	5	西周	江蘇句容	考古1977-5				2							
浮山果園	3	西周	江蘇句容	考古1977-5				3							
浮山果園	2	西周	江蘇句容	考古1977-5				5							
浮山果園	10	西周	江蘇句容	考古1979-2	3					5		3			盂=孟
浮山果園	12	西周	江蘇句容	考古1979-2	7					12		1	7		
浮山果園	14	西周	江蘇句容	考古1979-2	2					13		1			
浮山果園	15	西周	江蘇句容	考古1979-2	6					5		1			
六石		西周	浙江東陽	考古1986-9				9				1	3		



第14図 灰釉陶器 壘, 1 龐家溝M202号墓出土, 2 襄県霍莊出土

長江流域以南の灰釉陶器の器形は、やはり豆が圧倒的に多いが、黄河流域の華北にあまり見られない盂・盃・碗・盤が比較的多く、華北との違いを際立たせている。組み合わせは、罐・豆・盂の組み合わせ、或いは罐・盂・盤の組み合わせが基本と思われるが、豆のみの物も多く、また印紋硬陶が含まれる場合も多い。

長江流域以南の灰釉陶器は、組み合わせの面から見ても黄河流域の河南省洛陽市龐家溝遺跡・濬県辛村遺跡の西周墓、河北省房山県琉璃河遺跡の西周墓などの灰釉陶器とは異っている（第2表）。

洛陽地区出土の灰釉陶器の産地に関して、程朱海・盛厚興両氏は灰釉と胎土の分析から、洛陽地区と浙江地区の灰釉陶器のそれが類似することを指摘し、洛陽地区の灰釉陶器の産地を浙江省に求めているが、洛陽地区の灰釉陶器の器形と組み合わせを見ると、程朱海・盛厚興両氏の説には賛成し難い<sup>43)</sup>。黄河流域の諸遺跡から出土する灰釉陶器の産地に関して、結論を短絡的に出す事は出来ないが、器形と組み合わせからみて異った生産地の製品と見るのが自然であろう。同一の窯で焼成した異った製品を消費地・需要に合わせて出荷していたとは考えにくい。

中国の灰釉陶器の化学組成に対する実験的研究は少なくないが、洛陽地区出土の遺物に関しては良好なデータがほとんどない。また、純粋に考古学的方法論に本づく型式学的研究を行うにしても、我国にほとんど実物資料がなく、中国側から実測図、写真などの資料が未発表の今日、それも不可能である。洛陽地区出土の灰釉陶器に関する正式報告が早い機会に出版される事を期待している。

## 5. 周人の土器と殷人の土器

周知のように成王は、雒陽の地に殷の遺民を移したと言う。『史記』周本紀には、

成王在豊、使召公復營雒陽、如武王之意。周公復卜申視、卒營築、居九鼎焉。……成王既遷殷遺民、周公以王命告、作多土、無佚。

とある。また『漢書』地理志の河南郡・雒陽郡の条にも

周公遷殷民是為成周。

とある。『漢書』の編者である班固は雒陽における成周と王城の位置をそれぞれ別の場所に考えた<sup>44)</sup>と推定され、漢代河南郡雒陽郡の条で成周を取扱い、王城に関しては河南郡の下注で取り扱っている。すなわち『漢書』地理志の河南郡・河南郡下注に、

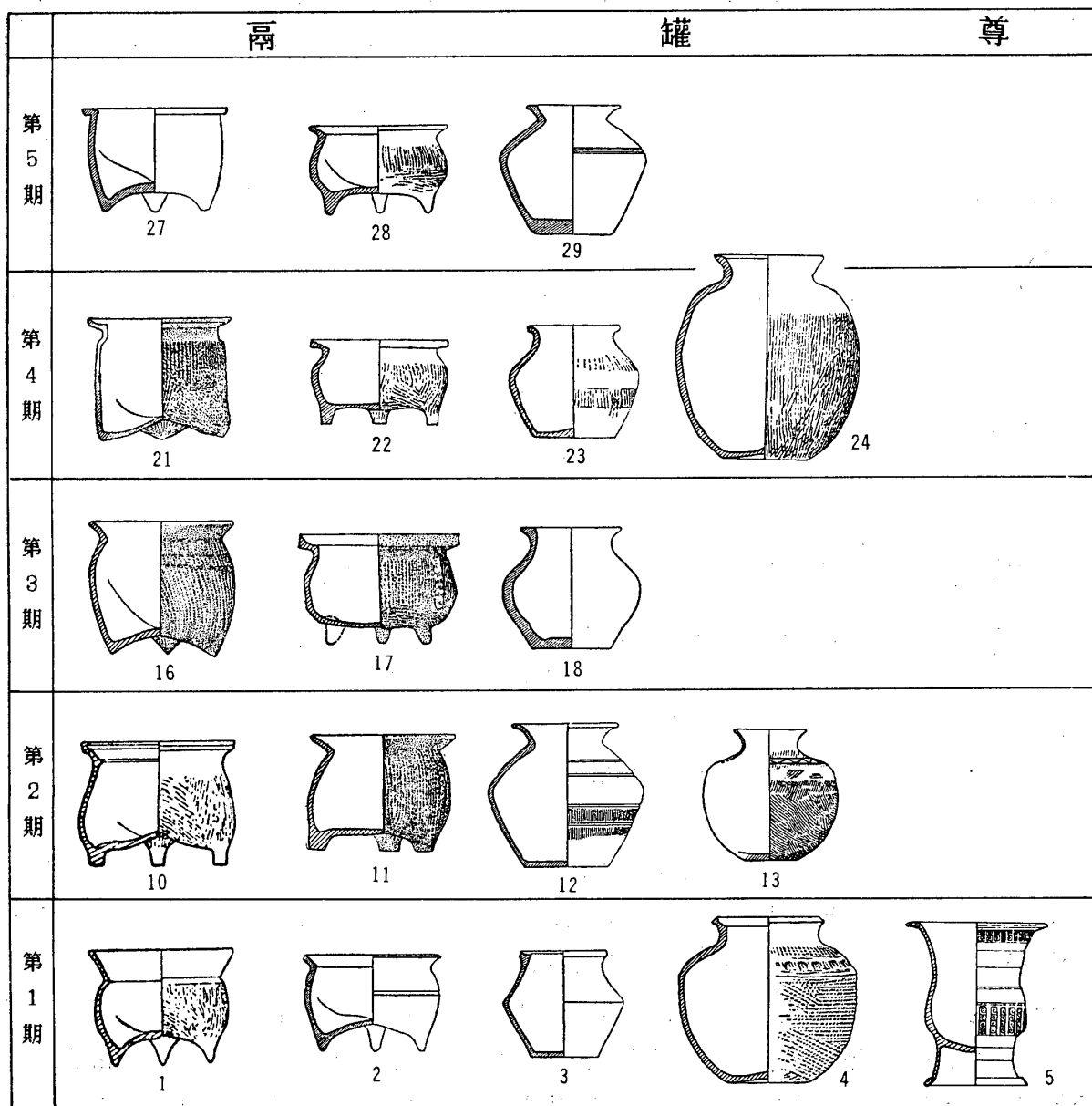
故郊鄠地、周武王遷九鼎、周公致太平、營以為都、是為王城、至平王居之。

とあって成周と王城の地理的な区別が見られ、成周を後漢の雒陽の位置、王城を後漢の河南郡の位置と推定している。この班固の考えには、近年順次発見されている西周遺跡の分布状況からみて賛成し難いが、今日の洛陽地区にいつの時か殷の遺民が移住させられた事は事実であろう。

洛陽地区出土の西周土器は、確かに殷文化の土器と密接な関係があると考えられる。周原や豊鎬地区に於いては先周文化土器の伝統のもとに西周土器が出現してくるのに対して、洛陽地区では殷墟文化の土器の伝統のもとに西周時代の土器が出現してくると見る事ができる。この事を言い換えると、当然のことではあるが、洛陽地区の西周時代の土器は地域的な伝統を基礎に成立している<sup>45)</sup>と見る事が出来る。

殷墟文化の土器の伝統とは何であろうか。簡単に言えば、河南省の安陽地区や洛陽地区で発見されている二里頭文化以来の分襠鬲を中心とした、分襠鬲・簋・盆・双耳罐・円底罐・尊などの組み合わせからなる土器群と見る事が出来る。

1952年に洛陽市東郊の擺駕路口・下壩村西区・東大寺区で発掘された墓から出土した土器は殷代



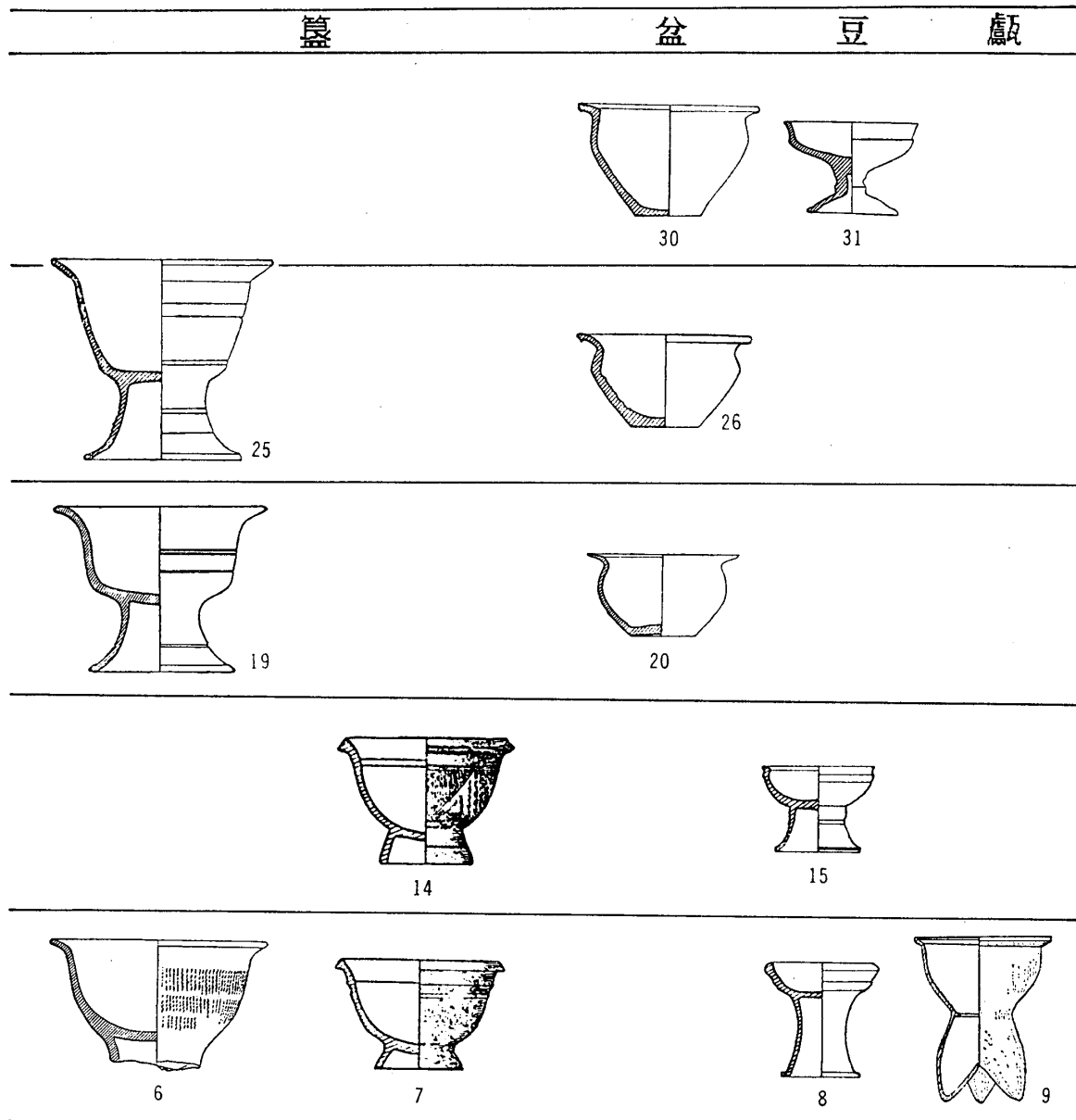
第15図 洛陽地区出土土器編年図 1・5・8東関M91, 2~4・6中州路M211, 7・9北窯F3,  
18・19中州路M123, 20西干溝, 21翟家屯, 22・23・24・25洛陽王城T203—M3, 27・28・29

(後期)の土器と報告されている<sup>44)</sup>。しかしながら殷墟文化第4期の土器と、西周初頭の土器の区別は極めて困難である。

西周第1・2期に属する洛陽西干溝遺跡の鬲、東関遺跡の鬲、北窯村遺跡の簋などの器形は、たしかに擺駕路口・下塢村西区・東大寺区の墓から出土した土器に連続する遺物と見ることが出来る。

たとえば下塢村遺跡の第167号墓は、殷代の墓と報告され、報告書にこの墓から出土した土器が図示されているので、それらを見てみよう。下塢村第167号墓の015号鬲や032号鬲(第2図の5・4)は、西周遺跡である洛陽西干溝遺跡出土の鬲(第15図の11)に類似した器形である。いずれの鬲も、“く”の字形に外折する巻沿ないし斜沿で、脚は短足で先端は平である。このような器形の鬲

洛陽付近出土西周土器の編年研究



10東関M88, 11・16・17・20・26・30・31西干溝, 12・3中州路M816, 14北窯F 2, 15東関M90, 中州路M640

をあえて殷代の遺物に限定する理由はない。下瑤村遺跡第167号墓の014号豆（第2図の8）は、洛陽東関遺跡の早期の西周墓であるM91号墓出土の豆（第15図の8）や東関遺跡の中期のM90号墓出土の豆（第15図の15）の祖形と考えられ、洛陽地区という地域に密接な関係を持っている。また下瑤村遺跡第167号墓の03号簋（第2図の7）は、基本的に殷墟出土の簋の器形に、たとえばYH225号灰坑出土の225E簋、YH073灰坑出土の238D簋、YH312灰坑出土の237J簋などの器形に類似する遺物である<sup>45)</sup>。さらにこれらの簋は、洛陽北窯遺跡の早期のF3号住居址や中期のF2号住居址から出土した簋（第15図の7・14）につながっていく器形と考えられる。

下瑤村遺跡の第167号墓が殷墓であるのか西周初頭の墓であるのか、確定するのは実のところ甚

だ困難である。第167号墓が殷墓であった場合に、洛陽の西周土器が、殷墓である第167号墓出土の土器に類似するのは、地理的条件から当然であろう。問題になるのは、洛陽地区の西周土器が河南省の地域的な伝統を別として、殷墟遺跡の殷墟文化の土器とつながりを持つか否かであろう。

周原・豊鎬地区における高領乳状袋足分襠鬲や連襠鬲を中心とした先周文化の土器器形は、分襠鬲を中心とした殷墟文化土器の器形と相当に異っている。周原・豊鎬地区においては西周に入ると当然の事として西周文化を代表する土器へと急速に変化していく。しかし、逆に洛陽地区及び周原・豊鎬地区の何れに於いても西周に入ると、鬲・簋・罐・盆・豆・尊・爵・觶などの土器器形に殷墟文化土器の伝統を受け継いだ器形が認められるようになるのも事実である。特に洛陽地区に於いては、西周文化的な要素を持つ土器が存在すると同時に殷文化的要素を持つ土器が多数認められる事実を指摘できる。

なにをもって殷人の土器と考えるかは難しい問題ではあるが、殷墟出土の土器は殷人の土器に間違いのないし、また先周文化に属する周原出土の土器の大部分は周人の土器であって、基本的に殷人の土器とは考えられない。

西周初頭の土器に見られる殷墟文化の伝統を器形の上に指摘してみよう。洛陽東関遺跡M91号墓出土の鬲(第15図の1)は、殷墟遺跡の出土の鬲、特に苗圃遺跡出土のXXII式鬲などの伝統を受けていると見て好いであろう<sup>46)</sup>。洛陽北窯村遺跡出土の簋(第15図の7・14)の器形は、殷墟遺跡出土の遺物番号YH073やYH018の簋の器形に極めて類似している。YH073号・YH018号簋は殷墟文化第Ⅲ・Ⅳ期に属する物である<sup>47)</sup>。また洛陽東関遺跡M91号墓出土の尊(第15図の5)も基本的に殷墟文化の器形を受け継いでいる。この尊の器形のもとは、殷墟苗圃遺跡の第Ⅲ期の尊(KT11・3:11)や殷墟西区第2区M121号墓の尊(121:12)などであると推定される<sup>48)</sup>。洛陽東関遺跡のM91号墓やM90号墓出土の豆(第15図の8・15)に類似した遺物には、殷墟西区第7区M974号墓の豆(974:1)や殷墟苗圃遺跡の豆(GT208・5B:256)などがある。

以上のように殷墟遺跡出土の土器と洛陽出土の西周第1・2期の土器を比較すると、両者が極めて類似している事が知られる。また別の観点から見たもう一つの重要な点は、洛陽付近での殷墟文化期遺物の発見の少ない事である。洛陽市東の偃師県に於いては偃師殷故城遺跡などから大量の二里岡期の土器が出土しているにもかかわらず殷墟文化の土器は極めて少ない。

洛陽付近出土の西周土器と豊鎬・周原付近出土の西周土器を比較すると、土器の器種の組み合わせの面からは、基本的にさほどの差はない。豊鎬地区西周土器の基本的組み合わせは、鬲・罐・簋からなるものでそれに豆・盆・壺・尊などが加わる。洛陽地区に於いても西周土器の組み合わせは、鬲・罐・簋から成るものでそれに同じく豆・盆・尊などが加わる。しかし個々の器形に於いては相当な差があるし、洛陽地区の西周土器には禮器の器形が比較的少ないのに対して、豊鎬地区の土器には禮器の類が比較的多く含まれる例がある。

器形の上では、洛陽地区と豊鎬地区の土器器形に、同じ西周第1期に於いても相当な違いが認められる。豊鎬地区の鬲は一般に口径に対して器高が高く縦長の器形で、袋足が深く、股の挟りが深

く、口縁が高く、縄紋も明確である。洛陽地区の西周第1期の鬲は、一般に口径に比べ高さが低く偏平な印象を持つ。洛陽地区の西周鬲は袋足が浅く、股が平で、また脚が短い実足と成っている物も少なくない。また、脚の先端に縄紋が施されない遺物も多い。洛陽地区の西周鬲と豊鎬地区の西周鬲を比較すると、第1・2期の鬲に於いては地域的な差は大きい、第3期以降第4・5期に入ると両地区の器形の差が小さくなり、類似した器形へと変化している。

豊鎬地区の第1・2期の罐は、一般に肩部が丸く平底の物が多いが、洛陽地区の第1・2期の罐には平底で肩部から胴部が張り、稜のある物や、円肩で凸底の大型の物が見られるなど、両地区の間には違いが認められる。

豊鎬地区・洛陽地区とも西周初頭から簋の器形が存在するが、本来、簋の類は周原・豊鎬地区において先周時代には見られなかった器形で、殷墟文化の簋が西に伝播したと考えられる。

盆の器形は、本来殷墟文化に於いて顕著な器形であったが、西周に入ると簋に変わられ、西周第3期まで数が減少する。豊鎬地区・洛陽地区の何れに於いても西周第3期に入って再び盆の器形が一般化するという、豊鎬地区・洛陽地区に於いて同じ現象が見られる。

このように土器に象徴されるどころでは、西周前期に於いては、周文化土器の特色を兼ね備えた器形が豊鎬地区に見られ、殷墟文化の伝統を受け継いだ器形は洛陽地区に特に濃厚に見られると言っている。洛陽地区に於ける殷墟文化的な土器が、西周文化的な土器に変化するの第3期に入ってからである。

洛陽地区では従来殷墟文化期の遺跡はほとんど発見されていない。また先周文化に属する遺跡も発見されていない。それにもかかわらず、西周開始時期の土器に殷墟文化的な要素が強く認められるのは、西周開始時期に殷人の移動があったとよると考えざるをえない。文献の記載では、成王の時に殷の遺民を洛陽に遷したと言うが、それ以前の武王の時代から殷遺民の移住があったのかもしれない。

## 6. おわりに

洛陽地区の西周墓と生活址から出土した土器を5時期に分類してみた。単純な型式学的な分類は可能であるが、相対的編年に対して年代の根拠を与える作業は、青銅器の伴出例が少なく、墓の切り合い関係もほとんど無く、豊鎬地区の土器編年の場合よりも困難であった。

しかしながら、5時期に分類した土器を豊鎬地区の土器編年と比較する事によってそれぞれの年代について、第1期を中州路M211号墓を基準とした武王・成王・康王時代、第2期を中州路M816号墓を基準とした昭王・穆王時代、第3期を中州路M123号墓を基準とした共王・懿王・孝王時代、第4期を洛陽王城T203-M3号墓を基準とした夷王・厲王・共和時代、第5期を中州路M640号墓を基準とした宣王・幽王時代と推定してみた。

洛陽地区の西周墓からは比較的多くの灰釉陶器が出土している。洛陽地区の西周墓から出土している灰釉陶器の器形は、豆が多く、外に罐・簋・壘・尊の器形が見られ、基本的な組み合わせは簋

・豆・壘または尊とみられる。今日、灰釉陶器の器形に三足器を見ないが、鼎などの器形が今後発見される可能性は高い。

以上の洛陽地区出土の灰釉陶器の生産地に関して、結論を短絡的に出す事は出来ないが、華北で生産された遺物と考えてよいであろう。洛陽地区の灰釉陶器の器形は、簋・豆・壘・尊・罐が中心的器形で、一般に胎土が硬く、釉の掛かりが均一で、陶器の表面がよくしまり、無紋に近い遺物が多い。このような灰釉陶器は、河北省・陝西省・甘粛省の地域からも発見されている。また洛陽地区出土の灰釉陶器は当然の事として、鄭州・洛陽地区の殷代灰釉陶器の伝統を受け継いでいるものと推定される。これに対して、長江流域以南の安徽屯溪・江蘇浮山果園・浙江六石などの灰釉陶器の器形には、罐・豆・尊・盃・碗などの器形が見られる。

黄河流域の諸遺跡から出土する灰釉陶器の産地に関しては、器形と組み合わせからみて、長江流域の灰釉陶器とは異った生産地の製品、つまり華北の製品と見るのが自然であろう。

洛陽地域の西周土器には、殷墟文化の伝統が濃厚に認められる。古典文献に見られる殷の遺民の移住があったのは事実かもしれない。西周初頭には殷文化的な土器が多く、第3期に入る頃に西周文化的な土器が支配的になってくる。土器の面から見ると、洛陽に於ける西周支配が西周初頭に必ずしも絶対的なもので無かった事をあわせて指摘しておきたい。

#### 註

- 1) 飯島武次, 1992A。
- 2) 葉万松・余扶危, 1985B。葉万松・余扶危, 1986。
- 3) 飯島武次, 1992B。
- 4) 中国社会科学院考古研究所, 1989。
- 5) 中国社会科学院考古研究所, 1989。
- 6) 中国科学院考古研究所, 1959A。
- 7) 中国社会科学院考古研究所, 1989。
- 8) 中国社会科学院考古研究所洛陽唐城隊, 1988。
- 9) 洛陽博物館, 1972A。
- 10) 洛陽博物館, 1972B。
- 11) 洛陽市文物管理委員会, 1964。
- 12) 洛陽博物館, 1981。
- 13) 洛陽市文物工作隊, 1983。
- 14) 洛陽市文物工作隊, 1992。
- 15) 郭宝鈞・林寿晋, 1955。
- 16) 葉万松・余扶危, 1985A。
- 17) 洛陽市第一文物工作隊, 1988。
- 18) 洛陽市文物工作隊, 1984。
- 19) 洛陽市文物工作隊, 1992。
- 20) 趙振華, 1985。
- 21) 唐蘭, 1976。
- 22) 飯島武次, 1992A。



### 洛陽付近出土西周土器の編年研究

- 23) 河南省文化局文物工作隊第2隊, 1956, 図版7の1。
- 24) 郭宝鈞・林寿晋, 1955の図11で孟としている器形は“簋”とすべきである。
- 25) 馬得志・周永珍・張雲鶴, 1955の図6・9。
- 26) 中国社会科学院考古研究所, 1987, 図105。
- 27) 飯島武次, 1992B, 「西周土器の編年研究……豊鎬地区の土器」(『駒澤史学』第44号)。王名と年代論に関しては, 本小論で再度論証する事を紙面の関係で止めて, 上記論文の結論のみを引用しておく。
- 28) 陝西省文物管理委員会, 1957。
- 29) 洛陽市文物工作隊, 1984。
- 30) 中国科学院考古研究所, 1959B。
- 31) 陝西省文物管理委員会, 1960。
- 32) 中国社会科学院考古研究所, 1989。
- 33) 中国社会科学院考古研究所灃西発掘隊, 1980。
- 34) 飯島武次, 1992B。
- 35) 陝西省考古研究所・陝西省文物管理委員会・陝西省博物館, 1979。
- 36) 宝鷄市博物館・宝鷄県図書館, 1980。
- 37) 中国硅酸塩学会, 1982。
- 38) 1992年8月22日, 新華社=中国通信, (『月刊文化財発掘出土情報』1992年10月号)。
- 39) 洛陽博物館, 1972B。
- 40) 郭宝鈞, 1964。
- 41) 盧連成・胡智生, 1988。
- 42) 河南省博物館, 1977。
- 43) 程朱海・盛厚興, 1987。
- 44) 郭宝鈞・林寿晋, 1955。
- 45) 李济, 1956。
- 46) 中国社会科学院考古研究所, 1987。
- 47) 李济, 1956。
- 48) 中国社会科学院考古研究所安陽工作隊, 1979。

### 引用文献

- 飯島武次, 1992A, 「洛陽西周遺跡雜記」(『平井尚志先生古稀記念論文集』郵政考古学会)。  
飯島武次, 1992B, 「西周土器の編年研究……豊鎬地区の土器」(『駒澤史学』第44号)。  
郭宝鈞, 1964, 『濬県辛村』(『考古学専刊』乙種第13号)。  
郭宝鈞・林寿晋, 1955, 「一九五二年秋季洛陽東郊発掘報告」(『考古学報』第9冊)。  
河南省博物館, 1977, 「河南省襄県西周墓発掘簡報」(『文物』1977年第8期)。  
河南省文化局文物工作隊第2隊, 1956, 「洛陽的两个西周墓」(『考古通訊』1956年第1期)。  
葉万松・余扶危, 1985A, 「洛陽市瀍河西周車馬坑」(『1985年考古学年鑑』中国考古学会)。  
葉万松・余扶危, 1985B, 「洛陽北窯西周遺址陶器的分期研究」(『考古』1985年第9期)。  
葉万松・余扶危, 1986, 「中原地区西周陶器的初步研究」(『考古』1986年第12期)。  
陝西省考古研究所・陝西省文物管理委員会・陝西省博物館, 1979, 『陝西出土商周青銅器(一)』(北京)。  
陝西省文物管理委員会, 1957, 「長安普渡村西周墓の発掘」(『考古学報』1957年第1期)。  
陝西省文物管理委員会, 1960, 「陝西岐山、扶風周墓清理記」(『考古』1960年第8期)。  
中国硅酸塩学会, 1982, 『中国陶瓷史』76~80頁, (文物出版社, 北京)。  
中国科学院考古研究所, 1959A, 『洛陽中州路』(『中国田野考古報告集』考古学専刊丁種第4号)。

飯島武次

- 中国科学院考古研究所, 1959B, 『上村嶺虢国墓地』(『中国田野考古報告集』考古学專刊丁種第10号)。
- 中国社会科学院考古研究所, 1987, 『殷墟發掘報告』(『中国田野考古報告集』考古学專刊丁種第31号)。
- 中国社会科学院考古研究所, 1989, 『洛陽發掘報告』(『中国田野考古報告集』考古学專刊丁種第38号)。
- 中国社会科学院考古研究所安陽工作隊, 1979, 「1969-1977殷墟西区墓葬發掘報告」(『考古学報』1979年第1期)。
- 中国社会科学院考古研究所澧西發掘隊, 1980, 「1967年長安張家坡西周墓葬的發掘」(『考古学報』1980年第4期)。
- 中国社会科学院考古研究所洛陽唐城隊, 1988, 「洛陽老城發現四座西周車馬坑」(『考古』1988年第1期)。
- 趙振華, 1985, 「洛陽西周卜用甲骨的初步考察」(『考古』1985年第4期)。
- 程朱海·盛厚興, 1987, 「洛陽西周青釉器碎片的研究」(『中国古陶瓷研究』北京)。
- 唐蘭, 1976, 「何尊銘文解讀」(『文物』1976年第1期)。
- 宝鷄市博物館·宝鷄県図書館, 1980, 「宝鷄県西高泉村春秋秦墓發掘記」(『文物』1980年第9期)。
- 馬得志·周永珍·張雲鵬, 1955, 「一九五三年安陽大司空村發掘報告」(『考古学報』第9冊)。
- 洛陽市第一文物工作隊, 1988, 「洛陽瀘水東岸西周窯址清理簡報」(『中原文物』1988年第2期)。
- 洛陽市文物管理委員會, 1964, 「洛陽市北窯龐家溝出土青銅器」(『文物』1964年第9期)。
- 洛陽市文物工作隊, 1983, 「1975-1979年洛陽北窯西周鑄造遺址的發掘」(『考古』1983年第5期)。
- 洛陽市文物工作隊, 1984, 「洛陽東関五座西周墓的清理」(『中原文物』1984年第3期)。
- 洛陽市文物工作隊, 1992, 「洛陽市東郊發現的兩座西周墓」(『文物』1992年第3期)。
- 洛陽博物館, 1972A, 「洛陽北西周墓清理記」(『考古』1972年第2期)。
- 洛陽博物館, 1972B, 「洛陽龐家溝五座西周墓的清理」(『文物』1972年第10期)。
- 洛陽博物館, 1981, 「洛陽北窯村西周遺址1974年度發掘簡報」(『文物』1981年第7期)。
- 李濟, 1956, 『小屯·第三本·殷墟器物甲編·陶器·上輯』(『中国考古報告集之二』, 中央研究院歷史語言研究所, 台北)。
- 盧連成·胡智生, 1988, 『宝鷄強国墓地』(文物出版社, 北京)。

## Studies of Western Zhou (西周) Period Pottery at Luoyang (洛陽)

IIJIMA TAKETSUGU

Western Zhou Period pottery from Luoyang can be broadly divided into five periods. Although determining these five periods from the different pottery forms is a relatively easy task, it is very difficult to decide upon the practical age at each division of the Western Zhou period. For example, pottery of the Western Zhou period at Luoyang were almost never excavated with bronze vessels, and it is very difficult to decide chronological stages at Luoyang. But pottery to be excavated from the Fenghao (豐鎬) region have often been found with bronze vessels, so it is very easy to divide the five period of the Western Zhou period and decide the practical age of each division.

After deciding the age of a period at Fenghao, we can compare the pottery that was excavated from two regions, Luoyang and Fenghao, and as a result we can know the practical age of each period or developmental stage of Western Zhou pottery at Luoyang. The first developmental stage coincides with the reigns of Emperor Wuwang (武王), Chengwang (成王) and Kangwang (康王) using the Zhongzhoulu (中州路) M211 Tomb as a standard. The second stage coincides with the reigns of Emperor Zhaowang (昭王) and Muwang (穆王) using Zhongzhoulu M816 Tomb as a standard. The third stage coincides with the reigns of Emperor Gongwang (共王), Yiwang (懿王) and Xiaowang (孝王) using Zhongzhoulu M123 Tomb as the standard. Similarly the fourth stage coincides with the reigns of Emperor Yiwang (夷王), Liwang (厲王) and Gonghe (共和) time using the T203-M3 Tomb at Luoyang Wangcheng (王城) as a standard. The fifth and final stage coincides with the reigns of Emperor Xuanwang (宣王) and Youwang (幽王) using the Zhongzhoulu M640 Tomb as a standard.

Much proto-porcelain is found from the Western Zhou tombs at Luoyang as well. There are many dou (豆) stem cups, guan (罐) jars, gui (簋) cups, lei (壘) jars and zun (尊) jars. A basic set of proto-porcelain vessels is composed of gui, dou and lei or zun. At this writing, proto-porcelain tripods have not been discovered but may be in the future. It may be that these proto-porcelain vessels were produced in Huabei (華北) province.

One can observe strong traditions of Yinxi (殷墟) culture on Western Zhou pottery at

飯島武次

Luoyang. The old story that people of Yin (殷) migrated from the Yinxu Ruins to Luoyang City may be true. There is much Yin-style pottery at the beginning of the Western Zhou period at Luoyang. For that reason, one can surmise that early Western Zhou government power at Luoyang might not have been too strong.